参考

・「村上春樹全作品 1990～2000 ①短編集Ⅰ」（解題）　講談社　平十四（著者自身による解題）

短い短編小説『青が消える（Losing Blue）』は、１９９２年にスペインのセビリアで開催された万国博「EXPO’92」を特集する雑誌のために書かれたものである。この雑誌はかなり分厚いもので、英「インディペンデント」、仏「ル・モンド」、伊「ラ・レプーブリカ」、西「エル・パイス」の各新聞が「新聞別冊（サプルメント）」というかたちで共同でつくり、それぞれの言語で発行した。

その雑誌のために、ミレニアムの大晦日を舞台にした短編小説を書いてほしいという依頼を受けたのが１９９１年のことで、「なんでまた今ごろそんなものを？」といささか不思議に思ったのだが、この万国博のテーマのひとつが「ミレニアムに向けて」というもので、それで主催者は世界各国の作家、五人か六人に同じテーマで小説を依頼したわけだ。僕は依頼を受けて小説を書くことはほとんどないのだけど、テーマもなかなか面白かったし、短いものだったし、仕事の合間でちょうど時間が空いていたこともあり、「ちょっとやってみよう」という気になって引き受けたのだろう。だいたいそのように記憶している。八年後の世界の話なので、多少近未来っぽい感じのものになった。

・「村上春樹スタディーズ２０００―２００４」（「個人化の時代における寛容のかたち―村上春樹と他者への態度―」）　松浦雄介　若草書房　平十五

最初期の『風の歌を聴け』および『１９７３年のピンボール』において主人公を私的世界にとどまらせた続けたのは、社会の変化の速度だった。急速な変化がもたらす喪失に固執することは苦痛をもたらすし、かといって変化を克服することもできない。このジレンマが主人公を受動的にさせた理由だった。

三作目の『羊をめぐる冒険』(1982) 以降の作品になると、冒険小説的な構成が強まり、それとともに、主人公の世界認識も変わってくる。主人公は相変わらず受動的であるが、しかしその理由が以前とは違ってくる。『羊』以降の小説において重要なのは、速度よりも複雑性である。出来事は複雑な因果の網の目のなかで生起する。だからそれはつねに予測不可能なかたちで主人公の前に立ち現れる。一般に、対象から距離をとることは防衛メカニズムの一種であるが、『風』や『ピンボール』において、その防衛は急速な変化が強いる喪失の苦痛にたいするものであったのにたいし、『羊』以降の作品においては、予測不可能なかたちで生起する出来事の衝撃にたいするものである。たとえば短編「蛍」(1983) では、主人公の親友が動機もなく遺書もなく自殺する。主人公はこの出来事に直面して死について内省的になるが、しかし自殺の理由を追及しようとはしない。「深刻に考えるには世界はあまりに不確実だし、たぶんその結果としてまわりの人間に何かを押しつけてしまうことになると思う」からである。複雑な因果の網の目のなかで、出来事は予測不可能なかたちで生じ、理解不可能な部分

を残す。その原因をどこに還元したとしても、その理解は多かれ少なかれ恣意的にならざるをえない。そしていったん起こった出来事も、複雑な因果の網の目を辿りながら、その意味を変えてゆく。だから、ほんのわずかな選択の違いが、後になって大きな違いとなって現れる。このような出来事の不確定性のために、認識は、つねに遅れて、そして後悔とともにやってくる。「気づくべきだったのだ。まず最初に気づくべきだったのだ」。

　この不確定性を生きる主体が出来事の当事者となるとき、予測不可能で理解不可能なのは自己自身である。主体は生起する原因と結果の複雑な流れに翻弄され、けっして行為をみずから選択する存在になることができない。いいかえれば、主体は自己原因となることができない。だから主人公は探求をつうじて、混沌として一貫性を欠いたように見える世界に隠れた因果的つながりを見出し、そのつながりのなかに自らを位置づけようとする。

　このように、私的世界にとどまることは、社会的世界における人間関係の葛藤を避けるためだけではない。むしろ、出来事を適当に理解したことにして片づけ、早々と社会適応に向かうよりも、逆に社会から距離をとり、出来事の複雑な因果の絡まりを掘りさげようとするためでもある。